

市民学芸員活動報告 平成27(2015)年11月 第13号



みはら玉手箱



「平成27年度市民学芸員実践講座」の各グループは活動中ですが今回は、本年6月から9月にシリーズで開催された各種講演会の様子と、情報発信グループの調査結果を報告します。尚、以下の講演会で市民学芸員運営グループが受付補助等で支援しました。

瀬戸内三原 築城450年事業

講演会 小早川隆景ものがたり 会場 リゾニオプラザ

- 第1回 6月7日 講演「小早川隆景の生涯」
講師 広島大学大学院 文学研究科 教授 本田 博之氏
- 第2回 7月26日 講演「隆景の小早川家相続と毛利家」
講師 県立広島大学 人間文化学部 教授 秋山 伸隆氏
- 第3回 8月2日 講演「小早川隆景と肖像画」
講師 広島市立大学 国際学部 准教授 城市 真理子氏
- 第4回 8月23日 講演「小早川隆景の城郭普請」
講師 佐賀大学 全学教育機構 教授 宮武 正登氏



〔第4回目の講座風景〕

宮武 正登氏

《 講演後のアンケート結果 》

会場の定員に近い370枚用意された前売り券は完売で、毎回会場一杯の聴講者で大好評の講演会でした。第一回と第二回で実施されたアンケートでは大部分が称賛でしたが、その他の感想も一部にありましたので、紹介します。

- (1) 満足度； 大いに満足 30.4%、満足 54.3%、普通 9.8%、不満 0.5% 大いに不満 0%
- (2) 理解度；
- 資料を紐解きながら根拠を持った内容でよかった
 - 深層的を絞ったお話でした。むつかしい歴史ですが興味が広がりました
 - 隆景の力のすごさがわかり、益々隆景のファンになりました
 - 講演は資料の説明に終わっている感ある（点）、もう少し前後のつながりが知りたい（線）
 - 私の知識不足で、話が難しい所もあった

合併10周年企画展

三原市の文化財展 ～文化財を守り伝える～ **関連講演会** 会場 リゾニオプラザ

- 第1回 9月13日 講演「博物館等における展示・収蔵環境について」
講師 文化庁美術学芸課 文化財管理指導官 宇田川 滋正氏
- 第2回 9月20日 講演「三原市の文化財修復」—小早川隆景画像・登覧画図—
講師 (有)墨仙堂 代表取締役 関地 久治氏
講演「仏像の修復について」 講師 楽浪文化財修理所所長 高橋 利明氏
- 第3回 9月27日 講演「東京大学史料編纂所の活動と曇沼寺文書の世界」
講師 東京大学史料編纂所 助教 井上 聡氏

1. 宇田川先生は国宝高松塚古墳壁画の修理作業に携わった方であり、貴重な体験談が拝聴できました。
2. 関地先生は、宗光寺の小早川隆景画像と妙正寺登覧画図の修復作業における苦心談があり、講演後展示場の実物で、あらためて解説がありました。
3. 井上先生には、源平合戦前後の沼田荘近辺の変遷について、興味深い解説をいただきました。

【質問受付】

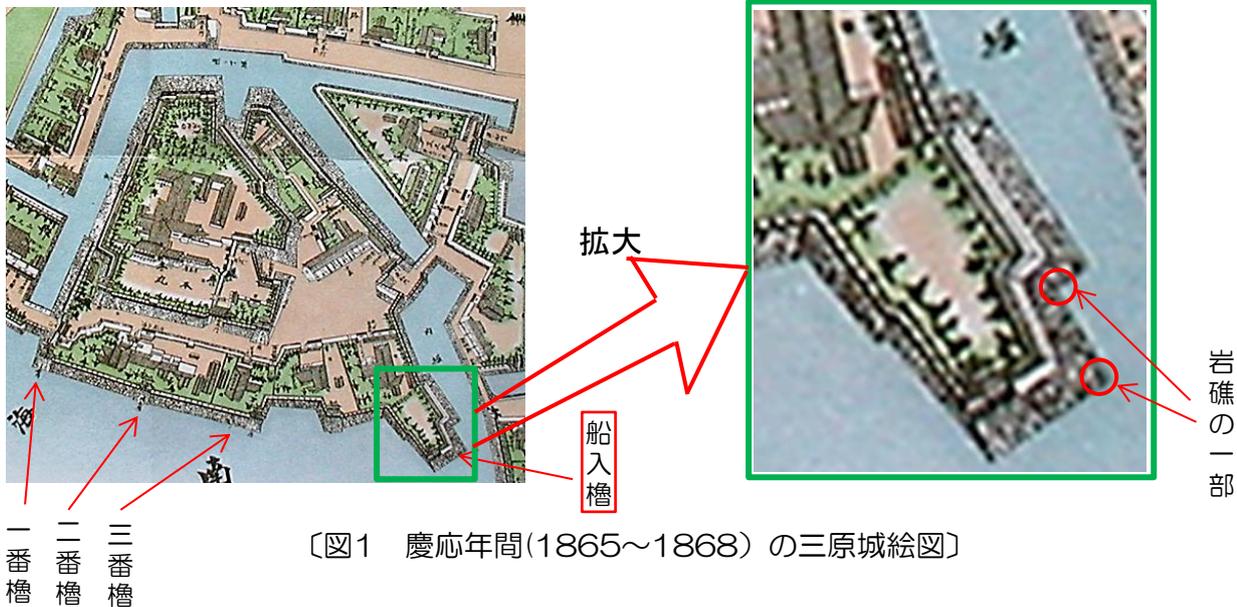
この「みはら玉手箱」への質問等は
三原市教育委員会文化課
bunka@city.mihara.hiroshima.jp
宛にお寄せください

みはら おもしろクイズ



(解答は頁の欄外にあります)

三原城 船入櫓跡の石垣は大丈夫？



〔図1 慶応年間(1865~1868)の三原城絵図〕

<調査のきっかけ>

本年8月23日(日)の小早川隆景ものがたりの講演で宮武正登先生から、「船入櫓の石垣は崩壊の危機にある」との指摘がありました。そこで、此の度現地を視察したところ、まさに先生のおっしゃる通りだと感じましたので、報告します。

<石垣の損壊状況>

- (1) 石と石の間に詰められた小石が脱落して、大きな隙間というより穴が空いています。
- (2) その穴から覗くと、裏込めの小石が露出しています。
- (3) 大きな隙間や穴は、船入櫓のほぼ全面に亘っているため、石同志の競り合い力(摩擦による固定力)が発揮できません。
- (4) この為、船入櫓の全ての面で、垂直方向ならびに、水平方向にも、はらみ現象が生じています。
- (5) このままで、大きな地震が発生したら、石垣崩壊の危険性が極めて高いと思われます。



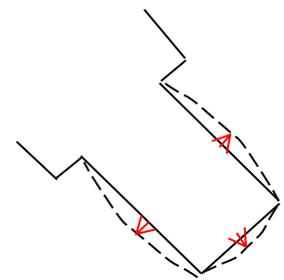
〔図2 石と石の隙間拡大〕



〔図3 裏込め石の露出〕



〔図4 垂直方向のはらみ〕



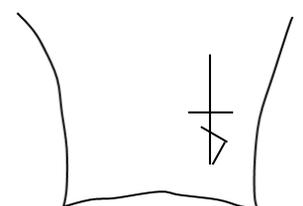
〔図5 水平方向のはらみ〕

<天主台の石垣との比較>

天主台の石垣は、垂直方向は扇勾配、水平方向も中央部が内側へ凹型に築かれており、垂直方向の土圧が高い程、石同志が強固に競り合う構造になります。



〔図6 天主台の北面〕



〔図7 天主台の上면視〕

一方、船入櫓の石垣は、全てほぼ

直線面のため、垂直土圧ではらむ危険性が大きい構造になっています。

<船入櫓の歴史>

(1) 三原湾に浮かぶ小島だった。

小早川隆景が、三原湾の大島と小島をつないで三原城を築城したといわれています。その小島の時代、ここにお城があり、城主小島撰津守祐直は毛利方とは敵対関係にある陶方でした。その為天文23(1554)年に毛利方の小早川隆景によって小島城は落され、城主は戦死、子息若狭守は妻の縁者を頼って但馬国にむかったそうです(備後古城記)。その後、若狭守の三男が得度して法名を行圓と号し、三原に帰って草庵を建て、築城の時埋め立て直後の今の地に建てたのが、東町の善教寺といわれています(三原の歴史と観光ガイドブック)。

(2) 小島の痕跡

船入櫓が当時の小島に建てられたであろうことを今に証明する岩礁があります。前頁の城絵図の南東隅にはっきりと見ることができます。尚、そこから東面の石垣に沿って北上しますと、石垣の隅部にもう一箇所岩礁が見えます。



〔図8 南東隅の岩礁〕



〔図9 東隅の岩礁〕

(3) 船入櫓の石垣は、いつ頃築かれたか？

図2に見られるように、石垣隅部は算木積になっている。広島大学大学院の三浦教授によれば算木積は西暦1600年以降の技術だそうで、福島時代以降に築かれたこととなります。

(4) 昭和天皇の宿泊場所

太平洋戦争終結後、昭和22(1947)年に昭和天皇は次のお歌を詠まれ、全国行幸をなされた。

戦の わざはひうけし 国民を おもふところに いでたちてきぬ
 わざはひを わすれてわれを 出むかふる 民の心を うれしとぞ思ふ

広島県では、同年12月7日広島市に始まり、同日三原の「船入櫓跡」の宿舎で一泊、翌朝船入櫓跡から、大勢の三原市民に手を振られました。その後、当時の三原3大工場を歴訪された際、いずこでも大歓声だったそうです。陛下の肉声を聞いたという人が、現在でも三原市内に大勢いらっしゃいます。



〔図10 船入櫓跡で宿泊された昭和天皇
 (芸陽日日新聞社「三原のあゆみ」より)〕



〔図11 船入櫓跡下に集まった市民
 (三原市総務広報課蔵)〕

おもしろクイズ

現在の船入櫓跡が、三原湾に浮かぶ小島だったという話は、にわかには信じがたいと思う方は大勢いらっしゃることでしょう。そのような方も、石垣の下端に露出している岩礁を見たら、なるほどと納得されると思います。その岩礁は南東部隅と、もう一箇所どこにあるでしょうか？ ヒントは本文にあります。

(ア) 南部の隅 (イ) 東部の隅 (ウ) 北部の直線部分



三原のお祭り



大須賀神社「チンコンカン」踊り奉納

「ちんこんかん」踊りは、毎年8月16日に、新倉町大須賀神社（牛神社）^{うしがみしゃ}に市内の4つの団体が奉納してきましたが、今年は三原市の合併10周年を記念して3つの団体が初参加し、全7つの団体でした。



「大須賀神社」

この牛神社は死んだ牛を祀る為に天文年間(1532～1555)に建立されたと伝えられています。

しかし、次第に雨乞いや虫よけの祈りも兼ねて、この踊りを奉納するようになったとも言われています。



「着飾った牛の像」

昭和8(1933)年7月、沼田川改修工事に伴いこの地に神社を移動したと石碑に刻まれています。中でも、沼田町のちんこんかんは、昭和34(1959)年10月30日に広島県の無形民俗文化財として指定されました。この「ちんこんかん」は雷鳴を表す太鼓や鉦を打ち鳴らし、赤い衣装に鬼面をつけ、小さな破魔弓を持った大鬼と、稲妻に見立てた六尺棒を振り回す小鬼が、大太鼓・小太鼓・鉦にあわせて力強く踊ります。



「赤鬼達の入場」

このほかに三原市無形民俗文化財に指定された“小坂チンコンカン踊り”（小坂町）“宗郷町太鼓踊り”（宗郷）“ハツ頭チコカン踊り”（田野浦と明神）があり、それぞれに古いしきたりに則り毎年奉納を続けています。

小坂チンコンカン踊りは、江戸時代の記録によると、小坂（現小坂町）・荻路（現長谷町）・沼田下（現沼田町・新倉町）の3か村が牛馬の安全祈願を行い、幟1本と踊りを奉納することとされていました。小坂村を出発して、荻路村・沼田下村へと進み大須賀神社に奉納しました。道具も、鉦・大太鼓・小太鼓・六尺棒・幟・鬼面などを使っています。



「三つ巴に交叉しながら踊る」

宗郷町太鼓踊りは、宗郷一帯で行われている踊りで、以前は6月に貝野の龍宮様に、8月16日に大須賀神社に奉納していましたが、今は8月16日に両社に奉納しています。

踊り手には、先達、太鼓打ち、鉦打ち、小太鼓打ちがいます。太鼓打ちは、大太鼓を肩から釣って、脇腹に抱えもつ者3人が真中に位置し、おのおのが太鼓を上からバチで叩きつつ、三つ巴に交叉しながら踊ります。

鉦打ち、小太鼓打ちはその外側にあってはやしたて、中の太鼓打ちを興奮状態に導いていきます。こうした状態は、「三味^{さんまい}どう」と呼ばれています。

ハツ頭チコカン踊りは、沼田町の「ちんこんかん」と同じ系統の踊りで、大太鼓打ち、小太鼓打ち、鉦打ちで構成されています。 田野浦と明神とが1年交代で奉納しています。

又今年は、三原市合併10周年を記念して、“沼田小学校ちんこんかん踊り” “木原町太鼓踊り” “深町太鼓踊り” も初参加しました。

沼田小学校ちんこんかん踊りは、平成15(2003)年から取り組み、児童全員による“ちんこんかん踊り”を披露しました。

木原町太鼓踊りは、宗郷町太鼓踊りの伝承元とも言われ、木原全域で雨乞い踊りとして伝えられている踊りです。



「木原町太鼓踊り」

もうひとつの深町太鼓踊りは、毎年盆に深町一帯で行なわれる太鼓踊りです、大太鼓20数個と10数個の鉦とからなっています。

この踊りは御調町丸河南の「みあがり踊り」や尾道市木ノ庄町などで伝承されている鉦太鼓踊りと類似しています。

「先達」を中心に円陣を作り、口説きの囃子言葉「♪そら、雨が降った祝いじゃ…。♪」に乗せ和太鼓を舞い打つ。最高潮に達したとき先達は「天竺の龍王なー それのさい いやはーは よーいー向三昧どう それさのさい はやーはーはー」と唱えます。



「深町太鼓踊り」

<祭りの帰途>

沼田町のちんこんかん等は、牛神社からの帰途、新倉の家庭一軒一軒の門前で踊りを披露し、その家々は祝儀を渡す習慣が、現在も続いております。



沼田町の「ちんこんかん」



「木原町太鼓踊り」



田野浦と明神の「ハツ頭チコカン踊り」



「宗郷町太鼓踊り」



「小坂チンコンカン踊り」

(2015・8・16)

当日配布された
「合併10周年記念事業“ちんこんかん”」を参考にしました。

石碑が語る三原の歴史

今回は海を眺めながら海岸線を西へと向かって行きます。三原市街から沼田大橋を渡り貝野で185号線に合流、ほどなく、穏やかな海と島々、そして多々羅大橋など、美しい瀬戸内の海を眺めながら須波、幸崎、そして山越えして小泉まで足をはこびます。

記念碑



須波港に「榑崎正員の墓及び関係遺跡」という説明板があります。正員は元和6(1620)年三原西町のそろばん製造業(のち薬種業)の家に生まれ家業に専念したのち、54歳のとき京都の山崎闇斎の門に学び、三原城主浅野忠義の知遇を得、城内で講義もしたそうです。晩年、須波に隠居しましたが、この地は東風が強く漁師の難儀する姿を見かね私財をもって波止を築きました。何度も改修されていますが、土台にはその正員の石組みを見ることができます。元禄9(1696)年77歳で亡くなりました。お墓は西町大善寺にあります。

JR呉線をくぐった山側、地福寺の東300mに屋敷跡があり、そこに榑崎正員顕彰碑が建っていると聞いて足を運びましたが、残念ながらイノシシ除けの鉄柵に阻まれ断念しました。地元の方に伺うと、現在は、倒壊の危険ありとのことで倒されているそうです。

185号線をさらに進んでいくと造船所のクレーンが目に飛び込んできます。幸崎です。ここには「清水南山生誕之地」に「南山碑」と橋をイメージしたモニュメントがあります。清水南山は明治8(1875)年幸崎能地に生まれ県内で初めての特待生として東京美術学校(現在の東京芸術大学)に入学、彫金家の道に進み彫金界の第一人者の地位を築きました。大正8(1919)年母校の教授となり、昭和23(1948)年73歳で亡くなりました。



[南山碑]



[モニュメント]

道 標



東面には
第三区青年会

各方角の面には
南のうらみ道
北みはらみち
西ただのみみち

横 19cm
奥行 16cm
高さ 90cm

[地藏堂前三叉路の道標]

海岸線を離れ山側に向かいます。幸崎小学校を過ぎしばらく行くとお堂が建っており三叉路になっています。能地方面、沼田東方面、忠海渡瀬方面への分かれ道です。足元に石の道標、振り返ると現代の案内板が見下ろしています。沼田東方面へ行くと記念碑で紹介した「清水南山生誕之地」があります。南山を大伯父とする日本画家平山郁夫が戦後そこに下宿し、この三叉路を通り旧制忠海中学校へ通ったそうです。

さらに沼田東方面へ走って行くと、幸崎と沼田東の境の峠にもう一基、建っています。山越えのきつい道、今は車であつという間ですが、昔も今も近道として多くの人々が利用しているようです。この峠から昔は三原道、忠海道があったようですが、今は荒れて通行できません。

この2つの道標を建てたのは「佐江崎第三区青年会」とあります。明治40(1907)年前後、各地区の若い人たちの組織した会があり、大正5(1916)年、佐江崎村青年團(後幸崎町青年団)に改称されたとあります。(豊田郡誌より)



[峠の道標 南面]



[峠の道標 北面]

西面 佐江崎第三区青年会
北面 右たこのうみ道
南面 右たのうらみ道
左すえみつ道
左のうらみ道

横 20cm
奥行 13cm
高さ 65cm

句碑・詩碑



そのまま沼田東町へ抜け、県道三原竹原線に出て小泉の龍泉寺を目指します。駐車場で車を降りお寺まで700m、お地蔵さんのお出迎えを受けながら登ると次第に防災林にさえぎられて見えなかった瀬戸内の海が見えてきます。石段を上り山門に立つと、目の前に黒滝山、その向こうに瀬戸の島々やしまなみ海道の多々羅大橋が望めます。境内に入ると右手に、三原城主第九代浅野忠順公ただよりの句碑があります。



[浅野忠順公の句碑]

三原城主甲斐守浅野忠順公
 山桜
 色香見せけり
 禅は禅の

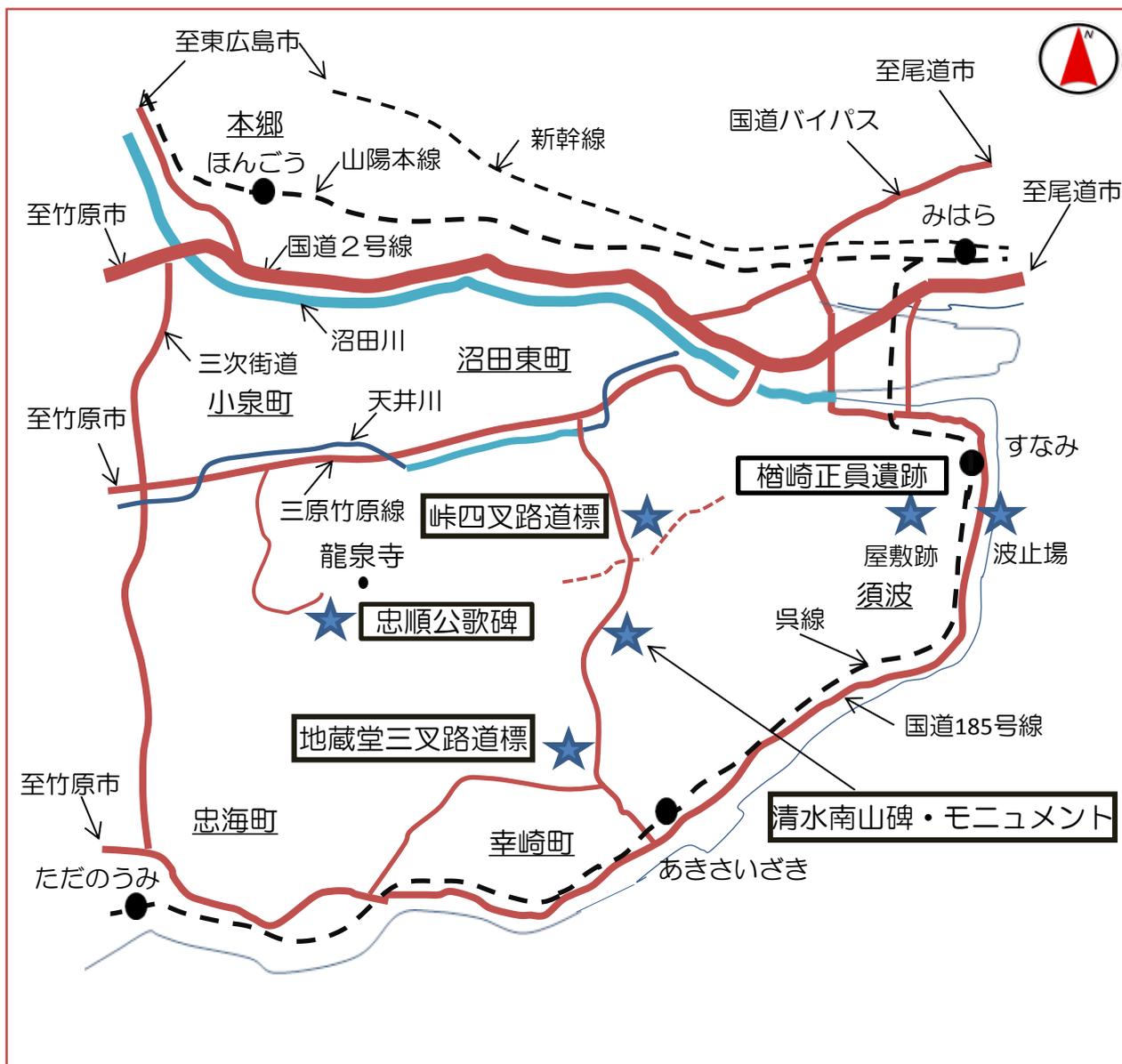
横 93cm
 奥行 26cm
 高さ 60cm

この句碑は、参道を改修した際、道標を兼ねたお地蔵さんやその関連工事を請け負った河城石材店ごうじょうが感謝の気持ちで造って寄付されたそうです。十年くらい前とのことです。

歌は小泉家の古文書の中にあったものです。龍泉寺は今も桜の名所ですが、昔も、特に庭前の老桜は有名であつたらしく、文化年間、広島八代藩主浅野齊賢なりかた参勤の途中この寺を訪れ称賛したそうです。そのあと、忠順も当寺を訪れ艶麗な桜花を賞でこの句を短冊にしたため枝に結ばれたと伝えられています。

浅野忠順は三原市史によれば、広島本藩第七代藩主重晟の七男で、広島城中で生まれ、三原第八代忠愛ただよしに子供がいなかったため忠愛死後、寛政5(1793)年12月、4歳で三原浅野家に入り第九代を相続し、15歳で忠順と名乗り甲斐と称しました。文化7(1824)年4月24日三原で若くして逝去しました。三原駅正面にある大きなレリーフ、妙正寺登覧画図を、広島藩藩士岡岷山が描いたのは、この忠順の時代です。妙正寺から三原城や瀬戸の島々を眺めたこの登覧画図、その原画は妙正寺にあります。浅野家代々の墓所ですが、この忠順の墓だけは奇しくも広島くのほうを向いて建てられています。

概略マップ





三原にある狛犬



今回は、本郷地区の狛犬を紹介します。（神社の由緒説明文は広島県神社誌による）

29. 恵美須神社（恵比寿・胡） 三原市本郷南6丁目

文禄4(1595)年、本郷の商人が発起して街の中央に当社を建立しました。
阿型は頭の上に子供をのせており、吽型は胸の下で子供に乳を与えているのが特徴です。



(単位：cm)			
	高さ	幅	奥行
阿形	77	35	57
吽形	81	26	67
年代	天保 7(1836)年 10月		
石工	(本郷) 弥助		
石材	花崗岩		
型	阿:かまえ型 吽:お座り型		



30. 橘神社（旧称 橘八幡宮） 三原市本郷南7丁目

神功皇后朝鮮出兵の折、当地より橘を奉り、また応神天皇上洛の節、縁故地なるを以って仮殿を建て止宿されたと伝えます。その後元慶年中（877～85）疫病流行し、里人八幡神に祈願してこれを免れ、ここに一社を建立、三神を勧請して橘八幡宮と名付けたといいます。



(単位：cm)			
	高さ	幅	奥行
阿形	122	45	77
吽形	127	45	80
年代	天保 6(1835)年8月		
石工	不明		
石材	花崗岩		
型	お座り型		



【参道石段下】



(単位：cm)			
	高さ	幅	奥行
阿形	110	40	75
吽形	127	40	75
年代	天保 6(1835)年8月		
石工	不明		
石材	花崗岩		
型	玉乗り型		



【参道石段上】



(単位：cm)			
	高さ	幅	奥行
阿形	104	30	73
吽形	100	32	68
年代	大正 5(1916)年4月		
石工	木村松太郎		
石材	花崗岩		
型	玉乗り型		



【社殿の前】